

16節。「しばらくすると、あなたがたはもうわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる。」

ここでの「しばらくすると」(μικρός、ミクロス)は二つの解釈がある。

一つは、主イエスの十字架上的死と復活という解釈。もう一つは、主イエスの十字架上的死と復活を第一義的に語るが、最終的には再臨のことまで語っているという解釈である。

多くの学者は前者を取るが、後者のように解釈する人たちもいる。

「『しばらく』は復活の出来事にだけ限ることはできない。同時に五旬節も、また最後には終末時における人の子の再臨も、当然含まれるはずだからである。これらすべてが、間もないイエスの再来の時に起こる。ということは、しかし、再来の約束は、聖霊＝助け主において彼の共同体に来る復活のイエスの出現を、まず第一には指す、ということである。それと同時に、再会の日は、弟子たるものがこの世でいつでもなし得る実存の経験になるのである。この経験がすべての質問を沈黙させ、喜びを全うさせることになるのである。」(NTD)

*再臨までという解釈の受け入れるなら、アドヴェントを迎えている私たちにとって、主イエスの再臨は「しばらく」の間、「ミクロン」の期間ということになる。

ペトロの手紙二 3:8「愛する人たち、このことだけは忘れないでほしい。主のもとでは、一日は千年のようで、千年は一日のようです。」

17—19節。「そこで、弟子たちのある者は互いに言った。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』とか、『父のもとに行く』とか言っておられるのは、何のことだろう。また、言った。『しばらくすると』と言っておられるのは、何のことだろう。何を話しておられるのか分からない。イエスは、彼らが尋ねたがっているのを知って言われた。『しばらくすると、あなたがたはわたしを見なくなるが、またしばらくすると、わたしを見るようになる』と、わたしが言ったことについて、論じ合っているのか。」

主イエスの十字架と復活を経験する前の弟子たちの無理解は続く(13:36「シモン・ペトロがイエスに言った。『主よ、どこへ行かれるのですか。』」)

16節の主イエスの言葉と比較して、17節の弟子たちの言葉には一つ付加されているのがある。「父のもとに行く」がそれである。主イエスが父のもとに行くことは十字架と復活を通してである。このことのために弟子たちは主イエスを見なくなるが、しばらくすると聖霊を通して自分たちと共にいる主イエスを見るようになる(ヨハネ 21章、マルコ 16:19—20 参照)

20 節. 「はっきり言うておく。あなたがたは泣いて悲嘆に暮れるが、世は喜ぶ。あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる。」

「はっきり言うておく」 (ἀμήν ἀμήν λέγω ὑμῖν、アーメン アーメン レゴウ ヒュミン) この言葉は、この後 23 節で用いられるのが最後となる。

「イエスは『しばらくすると』の意味はこうだ、というふうに説明しない。それを悲しみと喜びの時として明らかにする。それが本質的なことなのである。それは悲しみの時は、しばらくすれば喜びの時に変わる、というその『しばらく』が、真実であるからである。……。『あなたがたは悲しむが、その悲しみは喜びに変わる』とある。マグダラのマリアは墓の外で泣いていたが (20:11)、それは喜びに変わるものである (20:22 参照)。すなわち、『世が喜ぶ』の代わりに、弟子たちの喜びについて書いてある」 (伊吹)

「悲しみは喜びを生み出す。そしてその際、悲しみ (λύπη、リュペー) と喜び (χαρά、カラ) の比重は、このテキストで言えば悲しみの 4 回に対して、喜びはなんと 10 回である。そして最後に悲しみは消え (16:21)、喜びは増大し、心から満ち溢れてしまうのである。喜びが心の容量を凌駕している。最後の言葉は喜びであり、したがってそれは終末的であり、その本質は再会である。喜びは終末的性格を有し、すべては喜びへと向かっているのである。悲しみは喜びによって打ち勝たれていく。」 (伊吹)

21 節. 「女は子供を産むとき、苦しむものだ。自分の時が来たからである。しかし、子供が生まれると、一人の人間が世に生まれ出た喜びのために、もはやその苦痛を思い出さない。」

弟子たちの悲しみが喜びに変わることを、主イエスは産婦の例えを用いて語っている。すべての苦しみと悲しみを産婦は生まれた子どもに対する大きな喜びによって忘れ去るのである。

「このような苦難は、新しい命の喜びへと向けられた苦しみであって、世の否定的な苦しみとは違う。また努力の結果目的を達成して、その勝利の道をふり返るような喜びでもない。その時苦しみが喜びに変質して存在するのである。ここで言われている最も重大なことは、このような苦しみの後に、その苦しみを忘れ去り、消してしまうような喜びが待っているという、そのような苦しみの本質ではないだろうか。苦しみが神の確約によって、絶対的な仕方で喜びと結ばれ、消されてしまうということであろう。それは十字架と復活をつなぐ神の絶対的な『そして』であり、苦難は喜びへのスタートである。」 (伊吹)

22 節. 「ところで、今はあなたがたも、悲しんでいる。しかし、わたしは再びあなたがたと会い、あなたがたは心から喜ぶことになる。その喜びをあなたがたから奪い去る者はいない。」

新しい命が生まれる前の産婦のように、弟子たちは、最後の晩餐の席で御自分の死を予告するような主イエスの言葉によって、不安がり、悲しんでいる。そしてその悲しみは、主イエスが捕らえられ十字架上で殺されることによって現実のものとなる。けれども産婦が新し

い命と出会った時の、それまで苦しみ、悲しみをすべて忘れられるほどの大きな喜びに覆われるように、弟子たちも、復活し聖霊において再び来られる主イエスとの再会によって与えられる喜びは、もはや誰も奪い去ることのできないものとなる、と主イエスは確約して下さる。「弟子たちは、主を見て喜んだ。」(20:20)

23 節. 「その日には、あなたがたはもはや、わたしに何も尋ねない。はっきり言うておく。あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる。」

「聖霊=弁護者においてイエスが来るこの日は世の終わりではないが、すべての疑いの終わる日であろう。」(NTD)

「『その日』とは 22 節との関連で再会の日であり、それは同時に終末の日である。すなわち喜びが最早決して取り去られないことがないゆえにそれは終末を意味する。」(伊吹)

「尋ねる」(ἐρωτάω、エロータオー)。最後の晩餐の席で主イエス弟子たちが尋ねているのは、不安や悲しみからです。因みに、「尋ねる」と訳されている言葉は、ヨハネによる福音書に 27 回出てくるが、これはマタイ 4 回、マルコ 3 回、ルカ 15 回、新約聖書全体で 62 回であり、ヨハネによる福音書はその 3 分の 1 を超えている。「それだけイエスの言葉について、尋ねるべきことが多いと言えるであろう」(伊吹)

「『何も尋ねない』ということは、『尋ねる』ということが表している過去の悲しみや苦しみは、すべて喜びに飲み込まれてしまい(II コリント 5:4)、もはやそれを思い出すことがない。したがってすべての疑問は消失してしまうという救いの状態を言っている、と考えられる。あらゆることの意味についての疑問の答えは、救いと「喜び」なのである。」(伊吹)

「はっきり言うておく」(ἀμήν ἀμήν λέγω ὑμῖν、アーメン アーメン レゴウ ヒュミン)。重要なことをいう時に用いるこの言い方はここがヨハネによる福音書では最後となる。

「あなたがたがわたしの名によって何かを父に願うならば、父はお与えになる」

この言葉は 26, 27 節で再び語られている。「願う」と訳されている言葉(ἐρωτήσετε、エローテーセテ)は、他に、「問う、尋ねる」の意味がある。

「わたしの名によって」「父に願う」。14:13—14、15:16、16:26 参照。

「『わたしの名によって』ということは、イエスの仲介を意味するように思われる。」(伊吹)

「なぜ『問う』必要がないこと、喜びに満ち溢れたことが、願いの成就の可能ということなのか、……。この喜びに満ちあふれた状態は、願う存在としての人間の願いがすべてが叶えられる日なのである。そしてその願いとは、喜びが与えられることに他ならない。そしてその『願いの成就』については、22 節に心が喜びに満たされ、その喜びが決して取り去られないという約束が与えられている。つまりここでは、そのこと、『父に願うことはなんでも』与えられるということは、喜びが決して取り去られないことを意味している。因みに次のことも忘れてはならない。『低い者』としての人間の願いは、まず『日ごとのパン』に向

いている。そのことはヨハネによる福音書の6章5節以下から明らかである。イエスがフィリポを試したというのは、イエスは人々が何よりも今パンを必要とするかどうかを知っており、イエスがそれを与えるという信仰を持つことを、フィリポに要求したのである。したがって『願い』は精神化されていると考えるのは間違いであって、『願い』には『何でも（何であれ）』（14:13、15:16）、「何かを」（14:14、16:23）という言葉がついている。16:24ではその『何か』が終局的に、それが与えられる『喜び』として明らかにされている。それは結局イエスがわれわれを見ることなのである（22節）。」（伊吹）

24節。「今までは、あなたがたはわたしの名によっては何も願わなかった。願いなさい。そうすれば与えられ、あなたがたは喜びで満たされる。」

「『今まで』は受難と復活が起こった、つまり別れが再会となった『今』と対比されている。『わたしの何よって』は、イエスが代願者（1ヨハネ2:1）の意味に近い者として理解されているようである（14:16）。」（伊吹）

「願いなさい。そうすれば与えられ」。マタイによる福音書7章7節参照。ヨハネの手紙一3章22節、ヤコブの手紙4:3節なども参照。

「24節cの願い、受ける（与えられる）ことは、『あなたたちの喜びが満ち溢れるためである』と言われている。すなわち、喜びが満ち溢れるということは、喜びのうちに願い受けることにおいて、その喜びが文字通りさらに遂行されて満ち溢れてしまうことなのである。この願いは喜びの欠如から起こるのではない。それは22節の『あなた方の心は喜ぶであろう』という喜びから生まれてくるのであり、またそれは喜び満ち溢れるためなのである。・・・ここでの主題となる『喜び』は20節に始まり21節、22節（2回）と展開し、24節でその頂点に至る（17:13参照）。・・・」

24節の「あなたがたは喜びで満たされる」は、14:13「そしてあなたたちがわたしの名において願うなら、それをわたしはなすであろう。父が子において栄光を受けるためである」と比較される必要がある。父が子において栄光を受けるのは、『あなたたちの喜びが満ち溢れる』ことにおいてなのである。父の栄光とはここで父の愛が輝くことであり、それは信じる者の喜びが満ち溢れることにおいてなのである。イエスとの再会において満たされる心の喜び（22節）は、求めることが与えられることにおいて満ち溢れるものとなる（24節）」（伊吹）